

「人の霊」(1)

ベレーシート

(1) 秘密の昇天

●イエシュアが死からよみがえったのは「週の初めの日」でした。主の例祭では「過越の祭り」の「安息日」の翌日の「週の初めの日」は「**初穂の祭り**」です。復活された日の朝、イエシュアは初穂としてのからだを御父にささげる必要があったために、自分にすぎりつくこうとするマグダラのマリアに対してこう言われました。「わたしにすぎりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないのです。わたしの兄弟たちのところに行って、『わたしは、わたしの父であり、あなたがたの父である方・・・のもとに上る』と伝えなさい。」と(ヨハネ 20:17)。聖書には明確に書かれてはいませんが、復活されたその日の朝に、イエシュアは「秘密の昇天」をされているのです。御父である方のもとに上るということが、40日後の昇天だと考えているとすれば、一週間後にトマスの前に現われたイエシュアが、「あなたの指をここに当てて・・・わたしの脇腹に入れなさい」(ヨハネ 20:27)とは言われなかったはずで

(2) いのちを与える霊となられたイエシュア

●復活の初穂である「御霊のからだ」は時間空間に支配されません。御使いと同様に、地と天を自由に上り下りすることができるのです。復活したその日の夕方、イエシュアは隠れている弟子たちのところに現われました。そこは戸に鍵がかけられていたにもかかわらず、その戸を透り抜けて彼らの真ん中に立たれたのです。そして弟子たちに**息を吹きかけて**言われました。「**聖霊を受けなさい**」と言われたのです(同、22節)。息を吹きかける行為は、神である主が大地のちりて人を形作り、その鼻にいのちの息を吹きかけたシーンを想起させます(創世記 2:7)。弟子に「息を吹きかけて」は動詞「エンフユサオー」(ἐμφυσάω)のアオリストで、新約ではこの箇所だけに使われています。そして息を吹きかけられることを「聖霊を受ける(聖霊を受け取る)」ことと同義で語られています。「聖霊」は「 Pneuma・ハギオス」(πνεῦμα ἅγιος)で、ヘブル語にすると「ルーアツハ・ハツコーデエシュ」(רוּחַ אֱלֹהִים)となります。聖書で「Pneuma」「ルーアツハ」は「息・風・霊」を意味します。

(3) 40日間の顕現

●復活されたイエシュアが40日間、弟子たちのところ顕現されて御国の福音を再度語られたことは重要な出来事です。なぜ40日間なのかといえば、これは神の民のいわば新しいことを始めさせる準備期間だからです。40日(40夜)、400年という数は**神の大いなるわざがなされる前の準備期間**(試練も含む)なのです。例えば、

①ノアの大洪水・・・「地の上に**四十日四十夜**、雨を降らた」(創世記 7:4, 12, 17, 8:6)

②アブラハムの子孫が寄留者となる・・・主はアブラムに言われた。「あなたは、このことをよく知っておきなさい。

あなたの子孫は、自分たちのものでない地で寄留者となり、**四百年の間**、奴隷となって苦しめられる(創 15:13)。

③シナイ山での契約・・・モーセは**四十日四十夜**、山にいた」(出 24:18)

④イスラエルの荒野での生活・・・イスラエルの子らは、人が住んでいる土地に来るまで、**四十年の間**マナを食べた。彼らはカナン地の境に来るまでマナを食べた(出 16:35)。

⑤カナン地の偵察・・・**四十日**の終わりに、彼らはその地の偵察から戻った(民 13:25, 14:34)

⑥モーセの召命・・四十年たったとき、シナイ山の荒野において、柴の茂みの燃える炎の中で、御使いがモーセに現れました(使 7:30)。

⑦イエシュアの公生涯の前・・イエシュアは**四十日間**荒野にいて、サタンの試みを受けられた(マル 1:13)。

●イエシュアの復活後 40 日間の顕現がどれほど重要な期間であったことは疑いようもありません。失望と落胆の中にあったエマオの途上にある弟子たちにイエシュアは現われて、彼らにメシアが栄光を受けられるのは苦難を受けた後であることを聖書全体の中で説き明かされました。その間、彼らの心はうちに燃えていたことを聖書は記しています(ルカ 24:32)。イエシュアは神のみことばを通して彼らの霊の目を開かせたのです。これはヨハネが記す「息を吹きかけた」ことと呼応します。心がうちに燃えるという経験、人の心を開かせて悟りを与えるということが、イエシュアがなされた復活後の 40 日間にわたる顕現の重要な出来事だったのです。そしてこれらの出来事は神のご計画において包括的な新しい創造的な出来事であったのです。それは信仰によってのみ、個別的な経験となるためでした。

●ところで、復活されたイエシュアが弟子たちに息を吹きかけて、「聖霊を受けよ」と言って吹き込んだところは人のどの部分なのでしょう。それは人の心の中にはありません。人の霊の中です。この人の霊の中に息を吹き込むことによって、「心がうちに燃える」という経験をもたらし、「人の心を開かせて悟りを与える」という経験をもたらしたのです。今回から始まる「霊の中に生きる」というシリーズの主題は「人の霊」です。機能不全を起こしていた人の霊が、いのちを与える霊となったイエシュアが人の霊の中にとどまることによって、人の霊の機能が回復されて「霊の中に生きる」ことが始まったのです。これがどういうことかを私たちは正しく理解する必要があります。

●私が育った福音派の教会で、「人の霊」について、その言葉とその存在の重要性についても聞くことはありませんでした。しかし、聖書はそのことを正しく語っているにもかかわらず、教えられては来なかったのです。後でお話しますが、パウロはそのことを正しく認識していました。絶えずそのことを人に語っていたのですが、その後のキリスト教会の歴史で注目されることがなかったのです。しかし奥義派と言われるアンドリュー・マーレー、ウォッチマン・ニー、およびウイットネス・リーといった人たちが、このことの重要性を認め、語るようになりました。私もこれらの人たちから学んだことを分かち合っていきたいと思います。

1. 「神の霊」と「人の霊」

(1) 人は二区分か、三区分か

●新約聖書で「プニューマ」(πνεῦμα)を訳すとき、冠詞があるなしにかかわらず、「御霊」と訳されます。特に、新改訳がそうです。「霊」と訳されることは少なく、多くが「御霊」と訳されていますから、「人の霊」の大切に気づくことがないのです。そのために、訳語だけでは、ある箇所が神の霊としての「御霊」のことを言っているのか、それとも「人の霊」のことを言っているのか、判別がつかないのです。神の霊としての「御霊」と「人の霊」とは、緊密な関係をもっています、つまり、人の霊が回復して働くためには、御霊がそこに働いているのです。ところが、多くが「御霊」と訳されることで、「人の霊」の存在が意識されなくなってしまうのです。ですから、多くの

クリスチャンは自分の中に「霊」が働いていることを意識することができないばかりか、「霊とたましい」を区別し、それを見分けることさえもできずにいるのです。

【新改訳 2017】ヘブル人への手紙 4 章 12 節

神のことは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。

●この箇所では、神のことが生きて働くなら、関節と骨髄という微妙な部分さえも切り分けることができるように、「霊とたましい」さえも見分けることができるようになることを教えています。「関節」は場所を表わすことばで、「骨髄」は物質を表わすことばですから、そもそもつながらないので「分かれ目」という位置を表わすことばで表わせるものがないのではないかということです。「関節」とは骨と骨の接続部位のことで、「骨髄」はそれぞれの骨の内部にあります。それを切り分けるとはどういうことでしょうか。それは霊とたましいを見分けるのに等しいということなのです。しかし神のことが生きるとそれらを見分けるようになることを言っているのです。

●そもそも、人間が心とからだという二つの部分から成っているのではなくて、霊と心とからだの三つの部分から成っていることをパウロは以下の箇所で記しています。ただし、ここでは「心」ではなく「たましい」と言っています。

【新改訳 2017】I テサロニケ人への手紙 5 章 23 節

平和の神ご自身が、あなたがたを完全に聖なるものとしてくださいますように。あなたがたの**霊、たましい、からだ**のすべてが、私たちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのないものとして保たれていますように。

●もし使徒パウロが、この 23 節を記しておかなかったならば、人間は二つの部分から成るとしてしまふところですが。しかしパウロは「**霊、たましい、からだ**」の三つの部分から成るとしています。原文ではこれら三つは「カイ」(καί)という接続詞でつながっていて、しかもそれぞれに冠詞がついています。人は「**霊と魂とからだ**」のすべてによって構成されているということです。それぞれが固有の特性を持ちながら、全体が有機的な関係を持っていることを表しています。

- ① 「**霊**」は「**ホ・ Pneuma**」(ὁ πνεῦμα)
- ② 「**たましい**」は「**ヘー・ Psyche**」(ἡ ψυχή)
- ③ 「**からだ**」は「**ホ・ Soma**」(ὁ σῶμα)

●この節では、「ホ・ Pneuma」をどの聖書も「**御霊**」とは訳していません。パウロは神の霊である「**御霊**」と人の「**霊**」を明確に意識して区別しています。例えば、以下の聖句がそうです。

①【新改訳 2017】ローマ人への手紙 8 章 16 節

御霊ご自身が、私たちの霊とともに、私たちが神の子どもであることを証ししてくださいます。

②【新改訳 2017】ガラテヤ人への手紙 6章 18節

兄弟たち。私たちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊とともにありますように。アーメン。

③【新改訳 2017】ピリピ人への手紙 4章 23節

主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊とともにありますように。

④【新改訳 2017】Ⅱテモテへの手紙 4章 22節

主があなたの霊とともにいてくださいますように。恵みがあなたがたとともにありますように。

⑤【新改訳 2017】ピレモンへの手紙 1章 25節

主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊とともにありますように。

●「御霊」の部分が、「主」と「主イエス・キリストの恵み」に置き換えられていますが、「私たちの霊」「あなたがたの霊」の「霊」が明確に人の霊として意識されているのです。しかも人の霊は単独に存在しているのではなく、そこにキリストも御霊ご自身もおられるのです。ただしそれはイエシュアを信じ受け入れた人の場合で、信じていない人は依然として、霊の部分は機能不全を起こしているため、あななも「心とからだ」の二区分で構成されているものとして認識されるのは致し方ありません。

●「御霊」は「いのちを与えるキリストの霊」でもあります。復活の日の夕方に、イエシュアが弟子たちに息を吹きかけたのは、彼らの「霊」の部分に対してなのです。彼らの「たましい」でも「心」でもなく、彼らの「霊の中に」息を吹き込まれたです。そして信仰をもって聖なる霊を受け入れるようにと言われたのです。それは、人の霊の中に「いのちを与える御霊」(Iコリント 15:45)となられたキリストがともにおられるためです。キリストは私たちの心にはなく、霊の中に住まわれるのです。このことをしっかり受け止めたいと思います。これはキリストの霊がどのように私たちのうちに住んでいるのか、とどまっているのかを知るために重要なことなのです。また、私たちがキリストのうちにとどまるということがどういうことを知る上でも重要なことなのです。神を知るために、神の贖いの全貌を知るために、神のからくりを知ることが大切です。パウロの手紙の最後に、主が、あるいは主の恵みが人の霊とともにあることを記しているのは、その重要性に心を留めるためだったと思われる。

(2) 人の三区分はどのようにして造られたのか

●人の「**霊、たましい、からだ**」はどのようにして造られたのでしょうか。創世記 2章 7節には人が造られていくプロセスが記されています。最初のプロセスは外側の部分が形作られて、その中に(鼻から)「いのちの息」が吹き込まれることによって、人は「生きたもの」となったとあります。

【新改訳 2017】創世記 2章 7節

神である【主】は、その大地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。

それで人は生きるものとなった。

●これを原文で見てください。

ハッイーム ネシャーマット ヘアッファーヴ ヴァイツファハ ハーアダマー ミン アーファール ハーアダーム エット エローヒーム アドナイ ヴァイツェル

וַיִּצַר יְהוָה אֱלֹהִים אֶת־הָאָדָם עֹפָר מִן־הָאֲדָמָה וַיִּפַּח בְּאַפָּיו נְשֵׁמַת חַיִּים

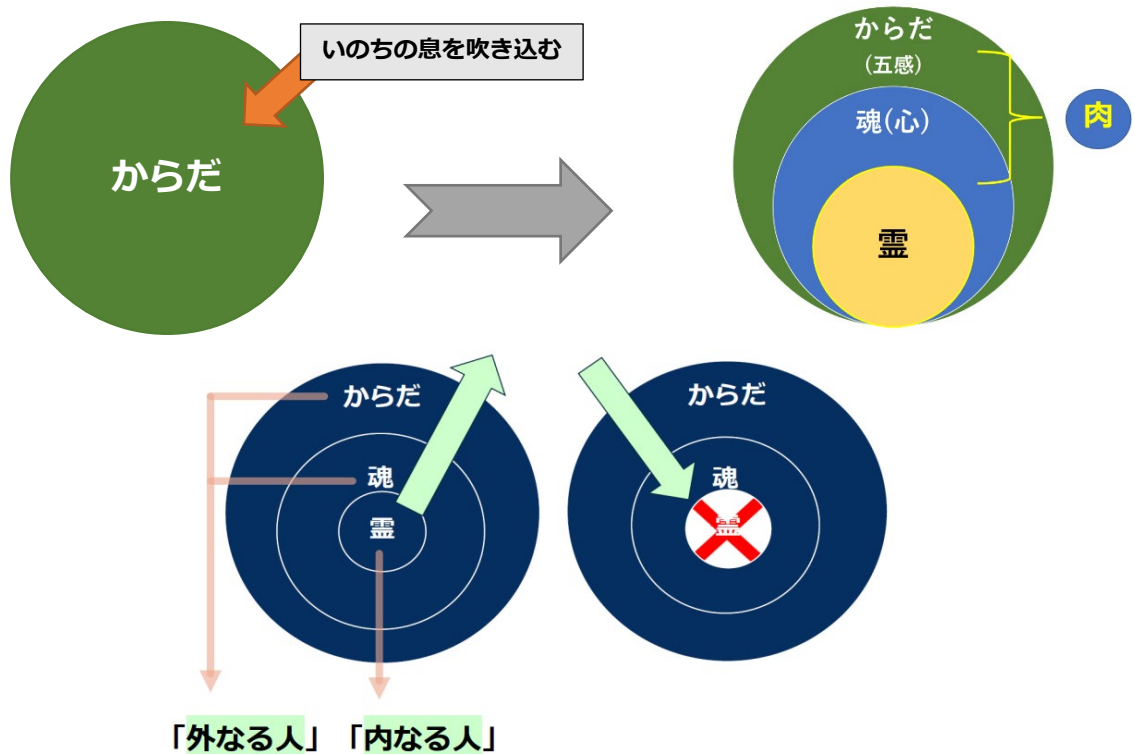
いのちの 息 その鼻に 吹き込んだ その大地 からの ちりで その人 を 神である 主は 形造った

ハッヤー レネフェシュ ハーアーダーム ヴァイエヒー

:הַיָּהוָה שָׁנָה לְנֶפֶשׁ
生きる ものと その人は なった

●大地のちりで形作られた人に、神である主は「いのちの息」を鼻から吹き込みました。この「いのちの息」のことを「ニシュマツト・ハッイーム」と言います。「ニシュマツト」とは「ニシュマー」(נְשָׁמָה)の連語形で「息」を意味します。これは「霊・風・息」を意味する「ルーアツハ」(רוּחַ)と同義です。「いのちの息」を吹き込まれたことで、人は「生きもの」となったのですが、これを「ネフェESH・ハッヤー」と言います。「ハッヤー」は「生きる」を意味し、「ネフェESH」(נֶפֶשׁ)は「存在、たましい、心、」を意味します。それ自体は動物にあるものと同様です。そうすると、「動物も人も同じだ」と思われるかもしれませんが。神を信じない者にとってはそうかもしれません。そのような「人は滅び失せる獣に等しい」(詩篇 49:13)のです。ところが、人には動物にないものが与えられているのです。それが「霊のいのち」なのです。

●ところで「いのち」の「ハッイーム」(חַיִּים)は複数形です。なぜここでのいのちが複数形で表されているのでしょうか。「いのち」の単数形は「ハイ」(חַי)です。しかしここでの「いのち」は複数形の「ハッイーム」となっています。この複数性の息が人に吹き込まれることで、「霊」と「たましい」を生み出すものとなったのです。動物にはこの「霊」はありません。「たましい」のみです。しかし人の場合、神の「いのちの息」がからだに入ったときに、一つは「霊」を生かすいのちとなり、もう一つは「たましい」を生かすいのちとなったのです。これが「いのち」が複数形であることの意味です。



●エデンの園の中央に置かれた「いのちの木」の「いのち」も「ハッイーム」という複数形です。ということは、「いのちの木」は人の「霊」と「たましい」の両方を生かし、再生するいのちだということになります。

3. 「霊・たましい・からだ」の機能とそれに関連する語彙

(1) 「霊」

●人の霊はそのいのちを受け取る受信装置的な部分であり、大切な役割を与えられているものです。人の霊は人全体の最も中心的な位置として、たましいに影響を与えます。それゆえ、霊とたましいは意識をもって区分されるべきなのです。神のことばが生きて働くとは、この区分があることを見分けさせてくれるだけでなく、霊によって、霊の中に生きることができるようになるのです。

(2) 「たましい」

●「たましい」は「からだ」の中に「霊」が吹き込まれた結果もたらされたものです。人は「たましい」によって特徴づけられます。「たましい」は「知性・感情・意志」の部分で、これを聖書は「ネフェシュ・ハツヤー」訳すと「生きるもの」「生きる者」「生き物」と呼んでいるのです。これはからだによって表現されることとなります。この部分は「霊」によって支配される場合は神のいのちの統制下のもとに置かれますが、「霊」によって支配されない場合にはからだからもたらされる情報(五感)によって大きく影響を受けるようになった「知性・感情・意志」が表現されます。たましいは人の自由意志を発動する器官です。

(3) 「からだ」

●「からだ」はそれだけでは生きてのものにはなりません。電球にたとえるならばフィラメントに相当します。そこに「霊」としての電気が通すことによって、フィラメントは光を発します。この光こそが「たましい」の部分です。「霊とたましいと光」が調和しているならば、それは人の究極的な表現となります。ところが、その中の霊が機能不全起こすと何が起こるのかといえば、電気の力ではなく、たましいの部分が光を自ら発して輝かせようとするようになるのです。それは真のいのちの光ではなく、たましいが作り出す知識の光となってしまうのです。そしてその知識の光はからだも朽ちらせてしまうのです。

4. 「霊とたましい」を見分ける

●これから、私たちが「霊とたましい」を見分けて、神のことばをいのちとして受け取るための演習をしてみたいと思います。詩篇 1 篇を読んでみましょう。その中から(1~3 節に限定)最も大切な語彙を一つ選んでください。

【新改訳 2017】詩篇 1 篇 1~6 節

- 1 幸いなことよ 悪しき者のはかりごとによらず 罪人の道に立たず 嘲る者の座に着かない人。
- 2 【主】のおしえを喜びとし 昼も夜も そのおしえを口ずさむ人。
- 3 その人は流れのほとりに植えられた木。時が来ると実を結び その葉は枯れず そのなすことはすべて栄える。
- 4 悪しき者はそうではない。まさしく風が吹き飛ばす粉殻だ。
- 5 それゆえ悪しき者はさばきに 罪人は正しい者の集いに立ち得ない。
- 6 まことに 正しい者の道は【主】が知っておられ 悪しき者の道は滅び去る。

●同じ詩篇 1 篇を別の訳で見てください。そこで、「【新改訳改訂第 3 版】の訳の 1~3 節を取り上げます。

- 1 幸いなことよ。悪者のはかりごとに歩まず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかった、**その人**。
- 2 まことに、**その人**は【主】のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。
- 3 **その人**は、水路のそばに植わった木のような。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。
その人は、何をしても栄える。

●この訳だと明確に繰り返されている語彙を見つけることができます。赤字で記された「**その人**」です。四回使われているので、目立ちます。目立っていますが、この訳でも重要なことばが「その人」だと答える人はそう多くはないのです。重要な語彙を、「幸いなこと」「【主】の教え」「喜び」「口ずさむ」「木」「実がなる」「何をしても栄える」という答えが返ってきます。ある人は9回目にして「その人」にたどり着いた方もいる一方、一発で「その人」と答えた方がいますが、10年間でただ一人だけでした。それほど気づかないのです。どうしてでしょうか。その一つの弊害に置換神学があります。置換神学の弊害は自分の心を中心にして神のことばを読むことにあります。「自分の心」とは、自分を中心として、自分の心の基準で読んでいることになります。どのように読むと、神のことばが生きて働くのでしょうか。そのための原則をイエシュアが教えています。以下のことばがそうです。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 5章 39節

39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。

その聖書は、わたしについて証しているものです。

●ここで「聖書」というのは、今日の「旧約聖書」のことです。その聖書が「わたしについて証しているものです」とイエシュアが言っているにもかかわらず、私たちクリスチャンもユダヤ人と同様のことをしているのです。自分の思いで聖書を読もうとしているのです。

●もう一つの弊害は訳された聖書の問題です。特にこの詩篇 1 篇は原文を見るとそれが明らかです。

アシェル ハーイーシュ アシュレー

אֲשֶׁר־יְהִי־אִישׁ אֲשֶׁר־

●この詩篇の冒頭には「アシュレー・ハーイーシュ」とあります。その意味は「**幸いなのは、その人**」です。「その人」とは「イエシュア」のことです。「アシャル」は関係代名詞で、それに続くことばはすべて「その人」のことを示す内容となっています。その内容を見て行くと、明らかに「その人」は尋常な人ではないことが分かります。孤高な人であり、かつ、主の教えを喜びし、昼も夜もその教えを口ずさんでいる人なのです。この人が口を開いたなら、何が飛び出すでしょうか。それは神のご計画にある御国の福音です。イエシュアがそうでした。彼が公生涯に入ってから語ったのは彼が口ずさんできたことです。そのことが詩篇 1 篇に預言的に記されているのです。そして最後に、「**幸いなのは、その人**」と言っている**存在**です。その存在とは御霊です。**御霊はイエシュアのことをあかしする存在**です(ヨハネ 16:26)。その御霊は「助け主」とも言われます。その声に聞き従うことが「**霊の中に生きる**」ことなのです。詩篇にはこの聖霊の声があります。それがどこにあるのかも含めて、「**霊の中に生きる**」ことをシリーズで学んで行きたいと思います。

2022.5.1